

ご挨拶



学長 大西 晴樹

明治学院大学はキリスト教による人格教育を建学の精神とし、その教育理念を一言で表現するならば‘Do for Others’「他者への貢献」と言い表しています。これは、新約聖書の言葉であると同時に、明治学院の創始者 J.C. ヘボン博士の生涯を貫く理想を表現したものです。

ヘボン博士は、幕末維新の日本へプロテスタント・キリスト教を伝えるべく 150 年前に来日したアメリカ人宣教医師です。医師としてニューヨークで成功を取めながらも、開国したばかりの横浜に上陸しました。当時の日本は尊皇攘夷の嵐が吹き荒れ、まだキリシタン禁令の高札が掲げられていた時代です。身辺にはスパイが潜入し、クララ夫人は何者かに殴打され心身ともに傷を負ったことさえありました。それでも博士は聖書の言葉に堅く立って、無償で弱者への施療活動をなし、患者との出会いを通して日本語を学び、夫人とともに青少年に英語を教えるべく明治学院の前身であるヘボン塾を開設し、日本最初の本格的和英・英和辞典である『和英語林集成』を編集・出版、ついに聖書を日本語へ翻訳したのでした。

さて、明治学院大学の教育活動で、‘Do for Others’という教育理念を直接体现するのがボランティア活動だといえましょう。1990 年代前半の明治学院大学においてボランティアは、いく人かの教員によるリレー方式の総合講座として、現場ではなく、教室で教えられていました。しかし、1995 年の阪神淡路大震災を契機として、ボランティア活動の重要さが認識され、ボランティア活動を正課であれ、課外であれ、明治学院大学において推進することに学内のコンセンサスが与えられました。じっさい明治学院大学は、震災後、明治学院ゆかりの神戸の賀川記念館を拠点として延べ数百名の学生を現地に派遣し、おもに子どもや老人のケアに献身的に当たり、神戸の復興に間接的ながら貢献し、参加した学生に多くの感動を与えました。その後 1998 年に横浜キャンパスに全国の大学に先駆けてボランティアセンターを開設し、2001 年には、白金キャンパスにも開設しました。また全国の大学におけるボランティア活動を支援するソニーマーケティング学生ボランティアファンドの事務局として中心的な役割を果たし、

2003年には優れた教育活動に対して競争資金が与えられる文部科学省の第一回目の特色GP（good practice）に選ばれました。

現在、ボランティアセンターは、白金と横浜のボランティアセンターを拠点にいくつかのプロジェクトを立ち上げ、コーディネーター、学生スタッフを中心に日常的な活動を推進しています。また、ボランティア情報を紹介するためにメールマガジン「MG ☆ボラマガ」を配信しており、その登録者は2010年1月現在404名（学生358名、教職員が46名）を数えます。

明学生の自発的なボランティア活動をさらに支援するため、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」を実施しています。大学グッズの売り上げの一割が大学からボランティアセンターに委託され、この賞の原資となっています。応募団体によるプレゼンテーションを中心とした審査会には、私も審査委員として参加しますが、熱のこもった発表を聞くことができます。

ボランティアセンターでは、海外でのボランティア活動にも力を入れています。毎年カリフォルニアに派遣するアメリカNPOボランティア体験学習プログラムはテーマを定め、地元のNPO活動の一翼を担い、日本のわれわれが置かれている問題との共通性を考えようとしています。

学長としてみなさんにお伝えしたいのは、'Do for Others'という教育理念は「言うは易し、行うは難し」です。ボランティア活動は、相手に感謝されてはじめて意味をもつのであり、そうでなければ、一人善がりのお節介か、たんなる自己満足にすぎません。ボランティア活動を通じて、自分たちの'Do for Others'の気持ちが、どれほど地域や近隣の人々に感謝されるのか考えてみるのは、他者を理解するうえで大切なことであり、もし感謝されていなければ、どうしたら感謝されるのか、試行錯誤することは、人間の成長にとって大切なことです。

明治学院大学の教育理念を体現するボランティア活動に、ボランティアセンターを通じて参加することによって、学生の皆さんがお金では買えない大切なものを手に入れることを切に願っています。

センター長挨拶

ボランティアセンター長 三角明子

2009年度明治学院大学ボランティアセンター活動報告書をお届けいたします。

今年度は、ボランティアセンター規程をはじめとする関連諸規程の改正、および白金ボランティアセンター拡張という、大きな節目となる一年でありました。

現行の規程の大本は2001年7月から施行されたもので、適宜手を加えてきてはおりますが、「業務」の項は手つかずのままでした。業務内容は「学内外のボランティア活動に関する情報収集」、「学生等に対するボランティア活動に関する情報の提供」、「学生等に対するボランティア活動への参加機会の紹介」、「ボランティア活動に参加する学生等への助言と支援」、「学内のボランティア団体への支援」、「その他、学生等のボランティア活動の促進に必要な業務」という6項目にわたり、学生への情報提供および助言と支援を主とする、[つなぎ]としてのボランティアセンターという色彩の濃いものと言えます。また、ボランティアセンターの設置目的も明文化されてはおりません。

ですが、2003年度に文科省の「特色ある教育支援プログラム」に採択されたことを大きなバネに、ボランティアセンターは、情報提供の内容およびツールの充実（外部団体登録制度の見直しと改定、ウェブサイト・ボランティア情報検索システム・メールマガジンの創設）、学生への支援体制整備（両校地への常勤ボランティアコーディネーター配置をはじめとする）はもちろんのことながら、センターそのものが企画催行するプログラムも開発していきました。ボランティアセンターは、「情報提供」、「助言と支援」にかかわる機関という当初の想定を大きく越えた存在となったのです。

折しも、明治学院大学は2009年度に文科省による大学認証評価の年度を迎えることとなっていました。ボランティアセンター執行部は、これを機に、これから先の10年を見据えたボランティアセンターのミッションの明文化および大学内での位置づけの確認が必要と考え、その作業を大学当局に依頼しました。その結果、2008年度、松原康雄副学長を座長に、計三名の委員から構成されるボランティアセンター基本理念策定委員会が置かれ、約一年にわたって、委員会での討議、センターのスタッフおよび外部へのヒアリングなどを経て、2009年3月に答申書が学長に提出されました。

この答申書の提言を受け、2009年度第一回ボランティアセンター運営委員会においてセンター長に改正案の提案が委嘱されました。センター長は作業チームを結成し、大学事務局等と連絡を取りながら、9月開催の第二回ボランティアセンター運営委員会に改正規程案を提出いたしました。改正規程案は運営委員会での承認後、各学部教授会・評議会・理事会での審議を受け、一部訂正のうえ承認されました。新規規程は2010年4月1日から施行されます。

新規規程には新たに第2条「目的」が加わり、第3条「業務」は、前年度の委員会答申を踏まえ、共通教育機関としてのボランティアセンターへと大きく踏み出すものとなっています。本報告書の「Ⅲ.資料」

編に、新旧ふたつの規程を掲載いたしましたので、どうぞご笑覧ください。

今回あらたに「業務」に加えられた項目のうち、(1)「サービス・ラーニング・プログラムの企画、実施」については、現在、日米 NPO ボランティア体験学習プログラム（本報告書 10～13 ページを参照）を実施しています。前身にあたる「アメリカ NPO ボランティア体験学習プログラム」(2005 年度スタート) から工夫と改良を続けておりますが、ボランティアセンターでは、大学当局をはじめとする関係各機関との交渉や議論を積み上げながら、授業科目としての開講を目指していきたいと考えております。

本年度はまた、白金ボランティアセンターが、リニューアルした年としても記憶されることでしょう。2001 年に開設された白金ボランティアセンターは、近年の活動の活発化および来訪者の急増に従い、非常に手狭になっておりました。今年度夏季休暇期間に工事が行われて学生の活動にあてられるスペースが劇的に広くなり、拡張オープンした秋学期にはこれを記念したさまざまなイベントの舞台となりました。緑ゆたかな横浜ボランティアセンターともども、どうぞ気軽にお立ち寄りください。

さて、ボランティアセンターは来年度、さらに新たな局面を迎えようとしています。

明治学院大学心理学部は 1 年から 4 年まで一貫して白金校地での教育を実施しておりましたが、来る 2010 年度からは、1・2 年生科目を横浜校地で開講することとなりました。これにともない、明治学院大学の 6 学部生すべてが横浜スタートとなります。

ボランティアセンターでは、校地の枠を越え各自が魅力を感じる活動があるセンターを選んで学生スタッフ登録ができる体制を取っています。授業のうえでは横浜に在籍している学生が白金学生スタッフに、また白金に在籍する学生が横浜学生スタッフに登録することが可能ではありますが、来年度以降は、一年生に対して白金での活動の魅力を伝える手段をさらに講じなくてはなりません。

また、聴覚障がい学生支援の体制についても変化のきざしが見えています。従来、聴覚障がい学生の支援はボランティアセンターが担当しており、専門の非常勤コーディネーターも配置されていますが、学内では、障がいを持つ学生を包括的にサポートする部署の設置の方向へとようやく大きく舵取りがされました。包括的サポートをになう部署誕生のあかつきには、ボランティアセンターは、学生ボランティアの募集や育成などを通して関わってゆくことになるでしょう。来年度は、よりよい支援体制の検討においても、センターが一定の役割を果たすことになるかと存じます。

末筆ではありますが、本年度も明治学院大学ボランティアセンターの活動にご協力いただいたみなさま、特に、活動報告書作成にあたり報告内容の確認に貴重なお時間をいただいた方々に、スタッフ一同より心よりの感謝を申し上げます。

本活動報告書の内容、およびボランティアセンターの活動についてのご意見・ご要望なども、お立ち寄りの際はもちろん、奥付記載の住所連絡先もご利用のうえ、どうぞお寄せください。